

## 友達が教えてくれたこと

小学校六年

ぼくには、外国に住む日本人の友達があります。年に一度、日本に来て学校に通ったり、家族で遊んだりします。外国での暮らしについて聞いてみると、食べ物や生活習慣、学校のルールなど、日本とのがいが多くあり、おどろくことばかりでした。

例えば、相手に声をかける時、日本では場所や友達かどうかによって、姓と名を使い分けて呼ぶけれど、外国ではニックネームや名前で呼ぶことが多く、名字では呼ばないそうです。そのため、日本に来て名字で呼ばれた時には、からかわれたようで嫌な気持ちになったと言っていました。しかし、ここからが彼のすごいところで、名字で呼んだ友達に、日本ではどのように呼び方を使い分けるかについて説明したそうです。すると、「日本人はとても丁寧だね。」と言ってもらえてうれしかったと教えてくれました。日本は多民族国家ではないけれど、ぼくの周りにも外国につながる人があります。異なる文化を

持つ人々が嫌な思いをせず、自分の国の文化を大切にしながら生活するためには何が必要なのでしょうか。ぼくは、外国に住む友達の話から、ちがいの理由を「知る」ことだと学びました。人は誰でも無意識に自分とちがうものをさけてしまうことがあると思います。周りと同じであることは安心できるからです。しかし、そこで止まってしまえば、ちがいのある人にとっては差別になります。なぜ、ちがいがあるのかを勇気を出して聞いてみたり、相手の国の生活や考え方を調べたりしてみれば、ちがいの理由が見つかるはずです。

今、ぼくたちの生活はインターネットや交通網を通して世界中とつながっています。今もなお差別で苦しんでいる人がいます。ぼくは、人の心が見えるようになるように、自分の文化のものさしで相手を見るのではなく、相手の立場に立って考えることを大切にしていきたいと思います。